

# 審議会等の会議結果報告書

課所名	教育総務課
-----	-------

会議名	令和2年度第2回諏訪市総合教育会議
開催日時	令和3年3月16日(火) 午後3時00分 ~ 4時30分
開催場所	諏訪市役所 大会議室
出席者	<p>(出席者)金子ゆかり市長、渡辺高秀副市長、小島雅則教育長、矢島紀子教育長職務代理人、岩波健一教育委員、関茂子教育委員、玉本広人教育委員、木島清彦企画部長、後藤慎二教育次長、寺島和雄企画政策課長、柳平直章教育総務課長、小林純子生涯学習課長、柿崎茂スポーツ課長、中澤健一企画政策係長、長田一彦教育総務係長、小口隆教育企画係長 (計16名)</p> <p>(欠席者) 矢崎博之駅前交流テラスすわっチャオ館長</p> <p>(傍聴者) 6名 ※別紙傍聴名簿参照</p>
資料	「未来創造ゆめスクールプランのこれからについて」

協議議題(内容)及び会議結果(要旨)

1. 開会  
(進行:木島企画部長)

平成 27 年度から始まった総合教育会議であるが、首長及び教育委員会により構成される会議であり、首長が招集することとされている。

昨年の9月25日に開催された今年度第1回目の総合教育会議では、城北小、高島小、上諏訪中以外の小中学校について、建物の概要やハザードマップにおける評価等ハード面、ソフト面から様々な現状や課題を意見交換し、共通理解を深めたところである。

2回目となる本日の総合教育会議では、第1回目の内容を踏まえ、改めて「未来創造ゆめスクールプランのこれから」について、それぞれの立場で考える機会とさせていただきたい。

市長は行政の代表として発言者の立場で当会議に出席し、副市長の出席を求め協議を行うこととする。

総合教育会議は原則公開とし、会議の議事録は、法の定めに従い公開することとなる。傍聴人及び取材者は、会議中は静粛にすること、議事に批評を加え、また賛否について表明しないこと、会議の妨害となるような行為をしないことをお願いしたい。

2. あいさつ  
(金子市長)

3月も半ばを過ぎいよいよ卒業シーズン、入学シーズンがやってくる。日頃から教育委員には、指導を賜っており厚く御礼を申し上げる。

諏訪市のみならず日本全国、時代の大転換期を迎えている。超高齢少子社会に加えて人口減少、そうした中で社会のあらゆる場面で色々な仕組みが変換を求められている。教育現場と言っても例外ではない。それぞれの自治体も同じ課題を抱えている中、諏訪市においては、関係各位の協力により、「未来創造ゆめスクールプラン」を立ち上げ、ここで大きな変化、新しく上諏訪小学校と隣の上諏訪中学校が小中一貫校をスタートする。かつて高島小学校から分かれていった城北小学校、また城南小学校の一部が一つの学校になる。

こうしてみると、時代を見る俯瞰的な視点が非常に大事である。今まで、そうした大局的な視点を持ちながら地域の方、関係する現場の方々とは色々情報交換、意見交換をしながら整えてこられた教育委員会、教育長の手腕に心から敬意を申し上げる次第である。この「未来創造ゆめスクールプラン」は、その1番最初の山を越える、山を迎えたという現状であり、まだ長い取組が待っている。今後も、この地域で育つ子どもたちが、どんな環境で学習し、生きる力をつけていくかというような視点を中心に、私たちはその環境や仕組みを整えていく責任がある。引き続きお知恵を拝借したい。

本日の総合教育会議においても、忌憚のない意見を出していただき、未来に向かって一緒に進んでいっていただけるようお願い申し上げて、冒頭の挨拶とする。どうぞよろしく願いたい。

(小島教育長)

ただいま市長からも挨拶があった。一つの方向性についてご理解をいただいたと思っている。総合教育会議というのは、何か議決したり決定するという会ではなく、お互いの立場を尊重しながら話し合っていく中で、互いを理解し合っていく、そして一つの方向性が少し見えたら良い、そういう会であると思っている。今日も期待をしている。

市長の話にあったいわゆる小中一貫校がいよいよ諏訪にできる。今その最後の場面、明日が閉校式、小学校の卒業式、翌日が中学校の卒業式。

私は常々このゆめスクールプラン、「ゆめ」って何なんだということを問い返す、そういう何年かであった。子どもにとって「ゆめ」って何だろうか？新しい学校なのか？あるいは何か自分が超えていくはるか向こうの素晴らしいものなのか？私は子どもの命というのは、いわゆる生命体としての命もあるけれど、一番大事な命は可能性である。将来に向けての可能性だと思う。それを叶える力をつける教育をしたい、そんなことであった。

教育の歴史をずっとたどってみると、実は色々学校は形が変わってきている。明治5年の学制発布以来、日本には学校が根付いたわけであるが、かなり違ってきていると思う。この諏訪地区もそうであって、高島小学校自体が、いくつかの変遷過程をとっている。そういう教育史的なところも大事にしたいわけであるが、今回はその中でも非常に大きい改革だと思っている。統合をして、中学校との小中一貫ができること、これは玉手箱のような素晴らしいものがそこにあるわけではなく、それぞれの努力が必要なものである。これからも努力と精進が必要である。新しさの中に、子どもたちの「ゆめ」を叶える方向性を持っているのではないかと考えている。

どうかよろしく見守っていただきたい。そして同時に、この東部地区だけでなく、西部地区や南部地区。これもみな諏訪市。諏訪市の子どもたちがいる学校であるのだから、こちらの改革もどのように進めたら良いか、多くの皆さんに意見を聞いていきたい。

新たな教育の方向を描いた。それを具体的にどうしていくかが課題である。今日も話し合いをしながら、その方向を探ってまいりたい。どうぞよろしく願いたい。

### 3. 議題

<テーマⅠ「未来創造ゆめスクールプランのこれからについて」>

(進行:後藤教育次長)

今日の議論の進め方であるが、「未来創造ゆめスクールプランのこれからについて」という資料を、教育委員会教育総務課でまとめた。来年度以降ゆめスクールプランをどのように進めていくかという素案である。今日はこの素案について、はじめに教育総務課から説明を行う。中身が3つの柱でできているが、この3つの柱を全て一括して説明を行う。その後、一つ一つの柱ごとに、はじめに教育委員一人一人からの意見、その後市長、その後教育長、最後に副市長という順番で、私のほうでコメントを振っていく。意見でも質問でも要望でもどんな立ち位置でも結構であるので、自由な発言をお願いしたい。

先程教育長の話にあったとおり、この総合教育会議は今日お示したこの素案をここで決定するというものではなく、ここでの意見交換を教育総務課が持ち帰り、最終的には定例教育委員会の中で方向づ

けをしていくものであることを、まず最初の共通認識でお願いしたい。

それでは、早速資料の説明に入る。教育総務課長の方から素案について説明申し上げる。  
(柳平教育総務課長 『「未来創造ゆめスクールプラン」のこれからについて(素案)』より説明)  
(後藤教育次長)

今、3つの柱について説明を行った。1つ目の柱では、4月からいよいよ始まる上諏訪小中、この一貫教育の評価・検証をどうしていくのか。それから大きな2の柱では、それ以外の地区、東部地区の城南小、諏訪中それから西部地区については、施設分離型を研究してできるところから随時実施をしていくという話。そして、特に南部地区については、この地区を重点地区と定めて取り組んでいくと、この3つの柱について話をさせていただいた。

では、1つ目の柱から意見、コメント等をいただきたい。まず、1番の上諏訪小中の評価・検証について、この進め方、取組について、はじめに教育委員の矢島委員から意見を願います。  
(矢島教育長職務代理者)

上諏訪小学校開校まであとわずかとなった。諏訪市にとっては新しい教育の先駆けであるため、次につなげるために評価や検証していくことが大事である。その評価や検証であるが、諏訪市のすべての方と共有していくことが大事だと考える。ここに至るまでを振り返ると、学校や地域等の場で小中一貫教育について説明を重ねてきた。また、「あいプランだより」や「未来創造ゆめスクールプラン」等が広報すわに挟み込まれたりし、多くの方に「小中一貫教育」という言葉が広まってきたように思う。ただ一方で、「9年間を通した小中一貫カリキュラム」、「小中の先生方が互いに乗り入れての授業」、「異学年交流」等一般の方にはまだまだなじみのない言葉が書いてあり、どんなことが行われるのか、それによって子どもたちに変化があるのか、変化があるとしたらどんなことが等々疑問に思われる方も多くいると思う。

ただ、まずは城北小、そして城南小の上諏訪小に通う子どもたちが新しい通学路や環境に慣れて、友達ができて、何よりも上諏訪小学校に通う子どもたち全員が学校を楽しんでいることが、まずは第一である。そして、少しずつ小中一貫教育の持ち味を取り入れながら、例えば中学生と小学生が一緒にものづくりや学習を通して交流をする、あるいは中学校の先生が小学校へ来て授業をする等、子どもたちの様子を見守りながら、そういう中で子どもの姿や先生方の感想とか想いを知りたいと思う。それらを含めて早い時期から、学校の様子を全戸配布のたより等で市民に知らせ続けていくことが必要だと思う。

そうしたことを行っていく中で、諏訪のどの地域に住む方も、自分の地域、そして自分の地域にある学校と照らし合わせて、興味や関心を持ち小中一貫教育について考えていただけたらと思っている。  
(後藤次長)

これまでの準備や取組の中でも、上諏訪小中のあの地域の方々には様々な情報や説明を申し上げてきたが、それ以外の地域の方々には少し情報が届いていなかったり、機運が上がっていなかったりというようなそんな心配の声も聞いている。矢島委員が話したように、上諏訪小中の取組をいかに市内全域へ広めていくかという視点の意見をいただいた。続いて岩波委員からお願いしたい。  
(岩波教育委員)

まず最初に、4月から始まる上諏訪小中、その設立に向けて努力いただいた関係各位に感謝をしたい。少し外れるが13日の新聞に高島小学校閉校に関する「高島小148年ありがとう。強くはばたけ道一筋に」という表題の記事があった。その中で、高島小学校に対する卒業証書というものがあった。少し読むと、「右の小学校は、多くの子どもたちの心に夢を与え続ける所定の課程を修了したのでこれを証明します」と。これを見ながら、学校に対する想いというものにウルッときた。ご存知の方も多いと思うが、話をさせていただいた。

上諏訪小学校においては、一緒になるということで新しい友達との交流の過程の検証といった、少し特殊な、統合した学校ならではの視点を見ていただくことも必要ではないかと思う。もちろん、生徒の成長していく過程であるとか戸惑い、先生の指導方法の成功例また、先生の迷い、悩み等を語り合い共有

し、また解決策等を多く、他校の先生も含めた中で、検討を行う場があつてしかるべきである。

また、地域の核となるべき学校であるため、当然地域の注目も集まってくる。外からの目線、例えばコミュニティスクールの委員、またコミュニティスクールを通して支援を行い学校運営に協力をいただいている方、地域の方の意見を多く聞く場を設けていただきたい。もちろん、PTA、保護者の意見も大切である。あわせて、これまで東部地区第 1 期の推進委員として活動いただいた方にも、何らかの形で今後の意見を聞き続ける環境をつくっていただければ、推進委員として色々努力された方がこれからもゆめスクールプランの一員だという思いの中で、活動に協力いただけるのではないかと思う。

(後藤次長)

PTA の役員や地域活動に取り組んでいただいていた岩波委員ならではの意見であると感じた。これまでの東部地区の推進委員に関わっていただいた関係者に対しても、やはり評価・検証をフィードバックしていく必要があるというのを私どもも感じたところである。続いて関委員お願いしたい。

(関教育委員)

ここでいよいよ上諏訪小学校、そして諏訪市で小中一貫校が始まるということに、大きな期待をしてワクワクしながら待っている一人である。

考えると、足掛け 9 年という長い間、時間や手間を掛け、それから子ども、先生、保護者だけでなく地域の方、同窓会の方、本当に多くの想いを酌み、何回もの会議を繰り返し丁寧に積み重ねてきた。この過程を振り返ることを大切にされたい。開校は確かに一つの大きな節目であるが、これから続く東部地区第 2 期、それから南部、西部への諏訪市全体の教育の推進のために、今までの会議の評価と検証をしていただくことは必ず必要なことである。矢島委員、岩波委員の話にもあったが、諏訪圏以外にももちろん県内、全国で数少ない公立学校としての小中一貫校の良さを、ぜひ広げていっていただきたい。

さらに今まで言った意見に重ねて、中核教員の先生がまとめをして記録をしてということが特に目に留まった。実際にやってみて学校、先生の中から声が上がってくるのが一番貴重な意見でないかと思う。例えば小中一貫校の良さ、小中の授業の乗り入れだとか異年齢集団の関わりができるのではないかとか、中 1 ギャップや不登校を少なくしていける、そういう良さがあるのではないかとこのところから始まった小中一貫校。そのために先生が、学校の組織として校務の立場から具体的に小中の時間割をどうするかとか、教科担任制を含めた授業のやり方だとか、小中学校の行事、地区の行事に子どもたちがどのように関わるか等具体的なことをぜひ広めていってほしいと思う。

それともう一つ、今組織の話からであったが、やはり学校、一番大事な学力の基礎、確かな学力を付けるための授業の確保、それから先生が小学校 1 年から 9 年までの系統性を見据えた上での研究会、教科会等をぜひ丁寧にいき、子どもたちに授業が身につけていくよう進める工夫がほしいと思う。

教科担任制とか複数担任とか支援学級の先生方が入ることであることとか、一人の子を複数の先生方で捉える、そういう良い面がきっと小中一貫校の中では、出てくるのではないかと期待している。授業形態の工夫等たくさん出てくると思う。具体的な記録を検証して積み重ねていってほしい。

実際には 4 月開校してみないとわからないことがたくさんあると思うが、1 回 1 回のことにあまり捉われるのではなく時間をやっぱり掛けて検証を積み重ねていってほしい。特に今年 1 年は始まったばかりで色々あると思うが、来年度に向けての年間計画とか行事の見直しだとか、今年の後半ぐらい、その頃に先生方の声を拾い集めて、時には子どもの声をそのまま反映させたりと、そういう評価があつて次へ進めていけたらと思っている。

(後藤次長)

中核教員の先生を中心にした、現場の先生の生の声を拾っていくということ。それから、時間がどうしても必要であるので、時間を掛けてしっかり評価をして、その次の年度につなげていくということ。そんな視点で意見をいただいた。教育委員最後に玉本委員お願いしたい。

(玉本委員)

ここで上諏訪小学校へ統合となり、1番最初の諏訪市立小中学校のあり方検討委員会に参加し、小中一貫校への提言の中に名前を連ねさせていただいた者として感無量なところがある。この間推進委員会で、今年度最後の会議があり、コミュニティスクールの部会長が、「本当にそれぞれ地域の皆さんの思いが色々あって、一つにまとまらないのではないかと不安を吐露されたことがあった。それをやはり「地域への愛情や、子どもたちへの愛情が動かしたのではないかと」ということをおっしゃっていた。本当に素晴らしい意見であると思った。そんなことが、上諏訪小学校へ連綿とつながっていくものと思っている。

実際にこれから小中一貫校が始まるわけであるが、今まで各委員が話したように学校の内部、そして地域の方からの検証等、様々な検証の仕方があると思うが、これからのことを考えると、他の小学校あるいは中学校の先生がきちんと上諏訪小学校の内情、現状をしっかりと見て、実際に見学して、先生から情報を得て、情報交換、研究、精査等を他の小学校の先生たちに行ってもらうことが必要ではないかと思う。要はそのための仕組みをつくってほしいと思う。内部、上諏訪小学校の先生たちが基本決まったカリキュラムの中で進めた上での評価になると思うが、外から見た目というのはやはり違う見方がある。そういう意味で他の小学校、中学校の先生が、上諏訪小学校を見たときにどうなんだということを中心に評価に盛り込み、次につなげてほしい。それが結局2つ目の柱につながることであり、他の学校は基本的には分離型で進めていくところが多いと思われるが、その中のカリキュラム等にも生かされていくのではないかと思う。ぜひその辺りを検討いただきたい。

(後藤次長)

先生方に評価をいただく中で、上諏訪小中の先生だけではなくて他の小中学校の先生も一緒になって評価に入ることで、上諏訪小中の取組が他の小学校、中学校に波及をしていく、そういった視点の意見をいただいた。では市長、今の教育委員の意見を踏まえてコメントをお願いしたい。

(金子市長)

現場に深く入り込んで観察をしている教育委員の意見は貴重だと思い拝聴していた。少し違う視点で期待、希望を申し上げたい。評価・検証するとき、どこを比較対象とするかといったときに、我々はとかく過去に照準を当て、それからどうなったんだという判断をしがちである。今デジタルトランスフォーメーション等色々な取組をしているが、過去に参考事例があるのかというと、今時代を切り拓いていく最先端にいる人たちは、過去の評価の対象では満足しない。未来において、例えば5年後、10年後、20年後にどういう姿でありたいか、夢を描いて、目標を設定して、それに対して今現在どこにいるのか、どこまで来たのかという未来に焦点をあてた評価対象。これをぜひしていただきたいという思いがある。

先程くしくも教育長より「未来創造ゆめスクールプラン」の「ゆめ」とは何だろうという問いをいただいた。問い掛けをいただいたので、うんと思って聞いていた。これは、バックキャスティング。要するに焦点、目標を未来へ置いて、そこから自分を見返すというようなバックキャスティングの発想。これを持ってもらおうと、その「ゆめ」というのは、未来の姿ではないかと思った。

上諏訪小学校、上諏訪中学校は、諏訪市内における小中一貫校、またゆめスクールプランのパイオニア、先導者であり、開拓者である。先導者、開拓者、パイオニアが必要なのは、夢と勇気である。高村光太郎は、「僕の前に道はない 僕の後ろに道は出来る」と言ったが、そうした事例として先生にも、子どもたちにもそんな気持ちで取り組んでいただきそして、それを周りでまた評価していただきたい。もちろん、今教育委員が話していただいた評価や視点は当然に必要な視点だと思う。加えてということである。

(後藤次長)

「未来創造ゆめスクールプラン」の「未来」に視点を置いて評価をしていく、そういった立ち位置の話をいただいた。では、教育長をお願いしたい。

(小島教育長)

評価・検証であるが、学校がしっかりと開いていくことだと思っている。方法としては、おたよりだとかホ

ームページであるとか、様々なものである。社会に対して周知していく、あるいは説明する、公開する、共に動く、共に働く、協働する。そういうことを絶えず意識していくことが大事。今何をやっているのかという自己判断、自己評価であるが、それが必要である。その方法としてコミュニティスクール、これは大変有能な仕組みになっていくと考える。それから、地域との連携というのもますます大事になってくる。このことが良い検証・評価につながってくるのではないかと考えている。

学校が勉強、学力だけでなく、これほどまでに人間関係の育ちに使命を負うことになったことは、無いのではないか。一人一人を大事にしていくことで、教育が様々な機能を持っていかなければいけない、様々な場を作らなければいけない、それぞれが評価の対象とと思っている。市長が言われたこと、私も賛成である。明日をどうするか、子どもの将来をどうするか、教育には目標がある。絶えず目標がある。大きな目標があって、それに向かっていくこと、その方法を大事にする、そこを考えなくてはならないと思っている。「ゆめ」というのは、まさに子どもの行く末。どんな人間になりたいのか、どんな子ども像として子どもの姿を描いているのか、そこが欠けたら検証はできないだろうと思う。

今回の「未来創造ゆめスクールプラン」の中では、諏訪市として教育の目標を短い言葉で言い切った。「自らを拓き 未来を生きる」この言葉。簡単な言葉のようであるが、大変大きなものが入っていると思っている。教職員、保護者、地域の方、それぞれが、この言葉の中にあるそれぞれを探していくこと、そのためにお互い論じながら、評価をし合いながらつくっていくことが大事であると思っている。

(後藤次長)

これまでのコメントをまとめて、最後に渡辺副市長からコメントをいただきたい。

(渡辺副市長)

今話をうかがった。今回小中一貫校がスタートするにあたって教育委員会のみならず、予算の編成等については市長部局になるため、庁内一丸となってこの仕組みづくり、その体制づくりそういったものについて議論をし、進めてきた。評価・検証であるから、その評価・検証をするその前段の部分がまずしっかりできていなければならないと常々思っており、そういった意味でもしっかり連携をしていかなければいけない。教育委員が言われたこれからのことを含めて、引き続き評価をする部分での体制、それから検証をした後の次のステップ、次なる評価にどう進んでいくかということも、引き続き我々としても教育委員会と一緒に、教育委員の話をうかがいながら進めていきたいと考えているところである。

(後藤次長)

今それぞれからいただいた意見を受け止めさせていただき、1 つ目の柱、上諏訪小中の評価・検証をこれからどうしていくか、もう一度教育委員会教育総務課で検討して、新年度以降、定例教育委員会に諮ってまいりたいと思う。

次の柱に話を移す。東部地区第 1 期以降の小中一貫教育の導入についてである。このうち、南部地区については、大きな 3 の柱で話をするため、南部地区の話は次に置き、東部地区城南小、諏訪中、西部地区豊田小、湖南小、諏訪西中、こちらにおける施設分離型の研究や実践等について、意見をうかがっていききたい。初めに矢島委員にお願いしたい。

(矢島教育長職務代理者)

立地的な面から考えると比較的取り組みやすい地区の一つが城南小学校、諏訪中学校であると考えられるため、城南小、諏訪中について意見を述べたい。

説明にあったように、施設分離型小中一貫教育の研究を始めていく中で、上諏訪小中学校と比べると少し歩く距離があり、どのように先生、児童生徒が交流を進めていくのが課題であると思う。コロナ禍でオンラインによる会議や授業、交流等急速に進んでいるが、学校においては顔を見て、体温や教室の温かさを感じて一緒に遊ぶ、工作をする、学ぶ等ワイワイガヤガヤ喧騒の中で育つものが大きいと思う。今の状態ではなかなかやりたいことをというわけにはいかないが、まずは安全や移動時間を考慮し、中学校の先生が城南小へ来て 6 年生の授業をする。あるいは城南小の高学年が中学校へ行って中学

生と交流をしたり、授業を受けたり、それから図書館等そういった施設も使ったりするのはどうか。もう少しコロナが落ち着いてくれば朝、諏訪中に登校して給食も食べたりする等、やりたいことはたくさん浮かんでくる。少しずつ交流を深めていくために、できることから始めていったらどうかと考える。

(後藤教育次長)

諏訪中と城南小との地理的な距離が、歩いて移動できない距離ではないが上諏訪小中に比べれば距離がある。そこで、先生が小学校に来て乗り入れ授業をするといった例を挙げていただいた。できることから取り組んだらいかがかという意見。続いて岩波委員にお願いしたい。

(岩波委員)

資料を見てもわかるが、これからの各地区、一律的な進め方というのはできない気がしている。現在コロナ禍で活動の自由や移動の自由が奪われているが、この時期にできることとして、先ほど話があった上諏訪小中の評価・検証と併せて先進的な一貫教育を行っている学校の研究、できる時期にはなるが、そういう学校の視察研修等を行っていただきたい。

施設一体型に関しては、過日信濃町小中学校という素晴らしい学校を視察させていただいた。今後分離型での一貫教育を行っている学校と諏訪市の今後のゆめスクールプランに該当するような学校の視察等も必要ではないかと思う。

前回の会議で教育長が、「ゆめスクールプランの前に、未来創造がついている。未来を創るために決して止めてはいけぬ歩み」ということを話した。また、今市長の話にもあったが、未来からの検証として未来から見ても評価してもらえる学校づくりを考えていかなければいけないと思っている。

小中一貫校といっても、様々な立地条件や教育内容があると思うが、諏訪の教育に役立つような先進校の研究というものを行っていただきたい。

(後藤教育次長)

コロナが落ち着けば、そういった視察研修にも取り組んでいきたいと思っている。建物に若干距離があったとしても、ハード面では難しくても、ソフト面でどのような一貫ができるのか、その辺りの問題提起をいただいたと思う。関委員お願いしたい。

(関委員)

諏訪市として小中学校が離れていてもどういことができるのか、それを考えたとき、矢島委員から話があったが、諏訪中と城南小は離れているが毎年城南小 6 年生が、諏訪中の音楽会に歩いて見に行くことが恒例になっている。中学生の素晴らしい音楽を聴きながら、僕たち私たちがこういうところへ来て段々と自分たちが成長していける先を思う良い機会になっているのではないかと考えている。

また、城南小も諏訪中も地域ボランティアの方との関わりを大変上手にしている。ものづくりもそうである。地域の方々との関わりを大事に持って行ければ、分離型であっても小中重ねて教育効果を上げることができると思う。

私は西中、地元が湖南であるため、西中と湖南小の分離型の一貫校の取組が少しでも早くできれば良いと思っている。校舎が隣り合っているので、どんどん積極的に進めていけるのではないかと期待する。上諏訪小中のやり方を見て、小中一貫の良さを情報交換しながら、共有できる場所はやり方を真似しながら、校舎が近い分だけ具体的な協力ができたり地域との関わりができたりということが行っているのではないかと考える。西中と湖南も地域ボランティアとのつながりを長年に渡って行っている。地域の方の支えや参加であるとか色々な工夫を取り入れ、またすばらしき仲間たちや西山の里等、老人施設もある。そういうところも学校にも地域にとってもお互いにとって良い経験になると思う。地域分離型である良さを生かしながら積み重ねて行っていただきたい。

(後藤教育次長)

確かに西中と湖南小は分離型の距離からいくと、スムーズに取り入れられる距離であると私どもも考えている。最後に玉本委員にお願いしたい。

(玉本委員)

関委員から西中と湖南小が非常に近いという話がでた。一点、豊田小はその 2 校から大変離れており施設分離型の一番、前回の総合教育会議でも話したが、一番実験的なところになると思っている。今回このコロナの騒ぎの中で、GIGA スクール構想が早まった。また、タブレットが全員に行き渡った。そんな中で、ぜひ ICT、オンライン授業、そういうものを生かしていただきたい。例えば湖南小の算数の先生が豊田小の児童と一緒に教える、例えば 4 年生の算数を同じ時間に、湖南小も豊田小も同じ先生の授業を受ける、そして例えばどちらかの先生が補助をする。そういうやり方もあると思う。また、前回の総合教育会議で、市長が学年ごとに校舎を代えても良いのではないかと話していたが、それも非常に面白い意見だと思う。例えば基本はオンラインの体制を整えていただくことが大事だと思うが、それとともにこれも前回話したが、スクールバス、コミュニティバスのような、まちづくりを含めた意味での移動の手段であるとかを考えると、例えば湖南小が 2 クラスあって今週は 1 クラスが豊田小に行き、豊田小の 1 クラスが湖南小に来て同じ 4 年生のクラスが交ざり合ってオンラインで同じ授業をするとか、そういう交流の仕方もあると思う。色々なやり方があると思うので、ぜひそんな逆に施設が離れていることを生かして、この時代オンラインを生かした ICT 教育を進めていただければと思う。

そういうことを進めることによって、例えば 3 番で重点地区が南部地区という提案がある。それを踏まえた話になるが、それが正式に決まった場合、西部地区の「取り残された感」が出る可能性がある。それを埋めていく手段としても必要になってくるのではないかと。最近でもほかの学校はどうなるのかという意見が教育委員会にあったような話があった。他の地区が遅れているのではなく、上諏訪小が進んでいるということである。取り残されたと思われぬよう、カリキュラムやソフト面の充実を図っていただきたい。

(後藤教育次長)

西中と湖南小が近い分、西中と豊田小の距離を顕著に感じる。そこを ICT やタブレット、オンラインというキーワードで、離れていながらも一体感を出していく手法について提案をいただいた。そういった特別な取組により、重点地区が他地区にいったとしても、その地区もまた別の視点で取り組んでいくということを PR できていくのではないかと、そんな助言をいただいた。では、市長にお願いしたい。

(金子市長)

皆さんの意見は面白い、自由な発想で頼もしいなと思って聞いていた。玉本委員も話してくれたが、私は地域の枠、このくくりを 3 つに分けて進めていただいているが、今回も城南小の一部通学区、一部の地域を上諏訪小学校へという対応があった。もちろん地域のコミュニティを大切にするという前提をすれば、今の形というのはそれなりの根拠があるわけだが、この同じ諏訪市の中で育ていく子どもたち、将来的には中学行ったり、高校へ進学したり、大学に行って諏訪市を飛び出したりして育ていくような子どもたちのことを考えると、今まであった枠をあまり固く捉えなくても良いのではないかと、それは地区の枠であったり、あるいは 6・3 制というもの。そういうところを自由な発想を持って、施設の効率利用、有効活用ができるような重大なトライアルを期待したい。

あるものをうまく上手に活用することを視野に入れ、そのようなこともお願いできたらと思う気持ちが半分、それから改革であるので、過去のそうした枠に捉われすぎなくてもいいのではないかと考える。

うろ覚えで間違っていたら修正してほしい。日本の教育では飛び級は認められていなかった。アメリカは、10 代の前半の子どもが大学へ行くことは許されている。特異な才能を持っている子どもを育てるといったような基本的な発想が違う。護送船団型の横並びを良しとする社会、それから飛び抜けた才能もそれを良しとする世界、色々評価があると思う。そこで、今は丁度改革。通信技術の急速な発展によって、社会がガラッと変えられるそういう時代である。教育の場面も、更にその次の社会を背負っていき、次の世界を支えていく子どもたちが育つことを考えたらどうか。自由な発想も良いと思う次第である。

(後藤教育次長)

では教育長お願いしたい。



(小島教育長)

今の議論であるが、現状の制度の中ではなかなか難しい。ただ、そうした色々なアイデアを含めた教育論。そういうものが市民の間や学校で高まっていくことがまず大事かと思う。

京都の有名な小中一貫校であるが、2回視察に行った。そこは6年生が小学校にいない。中学の校舎の片隅に校舎を造って入っていた。運動会の時だけ帰ってくるとのこと。10年以上前に、そこまで踏み出していたところがあり、私は大変カルチャーショックであった。そこは公立であったが、私学を中心に様々な形がでていいる。話し合いを通して、具体的なアイデアが出てくるのであり、それを大事にしたいと思う。

距離の話題が出たが、今回東部地区第1期に際し、各教科のカリキュラム、教育課程がおおよそできてきた。これは何も上諏訪中学校と上諏訪小学校だけのものではない。それを使いながら分離していても一貫教育の走りを始めていきたいと思っている。さらにそこにオンラインの仕組みが入ってくるとかなり色々なことができると思っており、分離であってもそれは一つの楽しみである。

(後藤教育次長)

最後に副市長にお願いしたい。

(渡辺副市長)

離れていても一体感をどう醸成するかという話の中で、ICTであったりとか地域の重要性であったりとか、相互の乗り入れ等については、すでに行われているというような話を聞いた。今日教育委員の中でもこれだけのアイデアが出てきている。研究に当たっては幅広く、教育委員、それ以外にも色々な関係者の意見を聞きながら進めていきたいと思っている。

(後藤教育次長)

いよいよ最後のテーマになる。東部地区の城南小、諏訪中、それから西部地区については、令和3年度から分離型の研究を進め、できるところから随時行っていくというのが事務局、教育総務課の素案。南部地区については、新年度以降ここを重点地区として定め、この取組を新年度強く進めていきたいというのが次の素案である。

南部地区を重点地区にした理由は、先ほど課長が説明したとおりハード面について、2点記載している。その他に学校間に一定程度の距離があること、中洲小と四賀小と南中がそれぞれ一定程度距離があるので分離型よりは、当初からここに力を入れていったほうが良いという判断がある。

進め方としては、来年度の前半では、どのようなことを検討していかなくてはいけないのか整理し、後半ではその組織を立ち上げていきたいというのが教育総務課の素案であった。

さて、南部地区を重点地区にしていくというこの3つ目の柱、ここが一番重たい柱になるが、ここについて意見を伺っていききたい。最初に、矢島委員からお願いしたい。

(矢島教育長職務代理者)

これからの重点地区南部地区であるが、私はこれから始まる組織づくりについて意見を述べたい。今回の東部地区第1期の経過を振り返ってみると、あり方検討委員会から始まって、その時々委員の方々の苦勞やエネルギーをいただいてここまで来たと思う。それに加えてPTAや同窓会、地域の方からご理解をいただいたことが大きかった。東部地区第1期では当初、子どもの数が少なくなっても学校を残してほしいという意見もあったが、皆さんがより良い教育環境を願って「スチューデントファースト」で考えていただいた。そして、その牽引をしていただいたのは、地域の歴史や引き継がれてきたものを知る方、学校や地域で役員をして苦勞されてきた委員であったと思う。私は高島小学校閉校記念式典での市長のあいさつの中に、「トランスフォーメーション」という言葉が出てきたのを覚えており、心に残っている。地域や学校も違えばその「トランスフォーメーション」も当然異なると思う。これから検討組織の設置が始まると思うが、委員の方には地域や学校を知る幅広い方、そして場合によっては東部地区第1期に関わった方や上諏訪小中学校の保護者の方もどうかと考えてきた。都市のデザインをする人はどうかとも思う。いずれにしても幅広い人選を考えていっていただきたい。

(後藤教育次長)

検討組織の設置について広く人選を考えていっていただきたいという意見をいただいた。私どもも東部地区第 1 期を進める中で、様々なご意見や励ましや時にはお叱りもいただいた。そういった経験値があるので、そういったものも生かしていければと思う。では、岩波委員をお願いしたい。

(岩波委員)

南部地区を重点地区とした理由、二つ中洲小、四賀小両校の老朽化と児童数増加に伴う校舎が狭くなったということ。そして、前回の会議でもあったが、もう一度学校を建て直し、また小中一貫をという二度手間を避けるという意味でも、またこの「未来創造ゆめスクールプラン」の最終目的、最終形態を市民の方に見ていただくという意味でもぜひ、一体型小中一貫校設立に向けて検討を重ねていただきたい。

ただ一点、地域の方に誤解を招いてはいけない。器が古くなったから建て直すということだけでなく、あくまでも小中一貫、9 年生のツールとしての学校を建てるということを忘れずに伝えながら進めていくことが必要ではないかと思う。

器を建てるとなると、夢を語るだけではなくて現実に目を向けなければいけない。協議の進め方によっては、教育委員会だけではなく当然市の企画だとか財政部門との連携も重要になってくる。施設一体型ということになると一番時間が掛かる地域になってくるとも思う。先ほど玉本委員の意見にもあったが、西部地区が取り残されるような不安があってはならない。南部地区を重点としながらも各地区今できること、これからできることを並行してやっていき、取り残され感がないような進め方をさせていただくことが必要である。

(後藤教育次長)

確かに岩波委員が話したように施設一体型ということになっていくとそれ相応の費用が生じてくるというところが現実である。その辺りも踏まえてこれから色々考えていかなければいけないと感じた。それでは関委員続けてお願いしたい。

(関委員)

諏訪市の教育全てを考え、ゆめスクールプランが進んでいる状況を見ると、3 校離れている中洲小、四賀小、それから南中の施設一体型を一つ最終的な目標にしながら、並行してそれぞれ分離型の工夫、教育を進めていく、二つの並行した考え方が進められると良いのではないかと思っている。

学校が地域の文化の中心になっている。いつの時代もきっと地区の人々、その周りの方々には思い入れがある。急に学校が変わってしまう、無くなってしまうということには抵抗を感じる方が必ずいる。地域の理解において、皆さんの理解がもらえるように丁寧な説明が大事である。その一方で先ほど市長の話で、枠に捉われない、地区に捉われないともあった。学区の見直しはどのような形が良いのか、人数が少なくなっているところもある、距離があまりに離れてしまっているところもある、学区の見直しをもう一回丁寧にしながら新しい南部地区施設一体型の進め方ができると良いと思っている。

それから検討委員会の立ち上げには、上諏訪小中の経過をこれも検討する、検証する良い場面だと思っている。良かった面をたくさん拾い上げて、新しい検討組織には、幅広い年代だとか、地区とか、人材だとか、それからこういうやり方が良かったとか、課題が残ってしまったとか、そのようなことを色々考えながら、ぜひその経験を南部のほうに生かして、つなげていってもらえたらと思う。

(後藤教育次長)

最後に玉本委員をお願いしたい。

(玉本委員)

ここで、上諏訪小中の第一歩が始まるわけであるが、それに当たって、教育総務課も一息つきたいところであったかと思う。上諏訪小中の様子を見てから次を決めたほうが良いのではないかという考えもあったのではとも思う。しかし、実際に始まる前に次のステップについて提案をいただけたというのは、この 30 年後施設一体型の小中一貫システムを諏訪で構築しようという大きな覚悟、意気込みを感じて心

強いと思った。

今、南部地区を優先地区、重点地区にするという理由についてはハード面が大きかったが、私は基本的に 30 年後の施設一体型の小中一貫校を諏訪でつくるというものの完成形として、南部地区で施設一体型の完成形を市民の方に早く見せるということに非常に大きな意味があると思う。そのような意味でハード面の理由もちろんあるが、今後 30 年の小中一貫システムのためにも、ぜひここに早目に施設一体型の小中一貫校を造っていただきたいと思う。

校舎を建てることはお金が掛かるということで、市長も頭が痛いところかもしれない。昔聞いた話で、福武書店の会長、今のベネッセの会長がこんなことを話していた。「経済は文化のしもべである」、良い言葉だと思った。その言葉を聞いて私が思ったことは、経済をつくっていくのも教育であるが、文化をつくっていくのも、その文化を支えていくのも教育である。諏訪の小学校は山のほうにあるところが多く、工場等は真ん中にある。もしかしたら経済優先のまちづくりを少ししてきたのかなとも思っている。

これから、在宅勤務等が広がっていく中、もしかしたら地方移住というような話が出たときに、教育環境というのは大きな選択肢になり得ると思う。そういうことを内外に示す意味でも、こういう教育環境を整えることは、非常に重要なことだと思う。

ぜひ教育総務課も覚悟を決めているわけであるから、市長も腹を決めていただき、しっかり予算を考え進めていただければと、私個人の意見である。

(後藤教育次長)

それを受けて、市長コメントをお願いしたい。

(金子市長)

教育委員会のほうで原案として出した課題、南部地区を重点地区にして進めていきたいということは、それなりの背景、根拠があるということを知っている。このハードルをクリアすることが次への展望を開く一つの鍵になることも理解している。

四賀小学の通学区域のうち、3 地区は諏訪南中ではなく、諏訪中へ進学する。広い範囲であり、もちろん通学バスの手配、それも一つのアイデア。一方で、最近スポーツジムに通っているが、インストラクターの先生から足の筋肉や、肉体の基礎をつくる時期にどれだけ歩いたり、運動したりしていたかということ聞かれる。小さい頃何をやっていたかと。先生が経験の中で聞き取ったもので、サンプルは少ないが、やはり子どもの頃にスポーツを行っていたり、学校が遠くて毎日歩いていたとかそういう人は足腰がしっかりしている。足腰がしっかりしているということは、フレイルになりにくい。健康長寿の基礎がつくりやすいということを考えると、子どもの頃の運動、体力づくりというのはすごく大事であると言われた。毎日歩くと、機械的に何も考えずに運動になっている。足が鍛えられることをイメージすると、ただ遠くなったからすぐに車で送迎ということでもないのかもしれない、バランスであると思うが、そのようなことも思ったりする。

いずれにしても、南部地区の老朽化した校舎に対する様々な要望、市長宛てにもいただいている。それから、来年度は中洲小学校の学童クラブ、プレハブであるが増築を 3 教室分決めている。そうした事情等を見る中で、ここを主だったテーマとして取り組んでいただけたらありがたいと思っている。なお、ここでも、過去の既成観念に捉われずということをお願いしたい。

(後藤教育次長)

教育長お願いしたい。

(小島教育長)

今の「歩く」ということに対する一つのエピソード。今回城北小と高島小が一緒になったことで当初から、あり方検討委員会から、いわゆるスクールバスを何とかしなくてはという議論があった。ところが今回ずっとやっていく中で、地域の方、お父さん、お母さんが、子どもは歩かせる。すごい決断でした。はっきり言われました。確かに安全は心配だし、交通も大変だと思うが、やはり歩かせたいと。素晴らしい決断だ

ったのではないかと思う。安全に気を付けながら子どもたちを見守っていきたいと思っている。そんな、エピソードである。

諏訪の中で、西部、南部、東部というけれども、みんなそれぞれ地域の立地条件が違う。今言っている南部地区は当初から3つの塊が浮かんでおり、非常に大きな地域であるけれども、考えやすいところもあって、良いのではと思っている。

東部地区のように学校が近い状態ならそのところは考えなくてもいいが、いわゆる一貫教育というものを地域の方含めて青写真をつくっていく中では、南部地区については噛み応えがある。やがて形ができてくる過程が素晴らしくなってくるのではないかと思っている。

まさに重点。四賀小へ行けば、施設も老朽化している。子どもたちに良い環境を与えることも「ゆめ」。これは大事な「ゆめ」であるからそこは大事にして、再度もう一回しっかり議論して南部地区ならではの形をつくっていきたいと思う。

それから全国的に見ると、いわゆる一体型ももちろんいっぱいあるが分離型も結構ある。私たちが行った京都の宇治は一体型が1つにあとは分離型。その後どうなったかは不明であるが、それぞれの良さを発揮していたと思っている。

私たちは一体型を3つつくるという目指すべき方向性を持っている。その中で、色々な条件が出てくるのかなと思っている。

(後藤次長)

それでは最後に、渡辺副市長お願いしたい。

(渡辺副市長)

素案として示された南部地区を重点地区とすることについて、今後の進め方の部分、いかに丁寧に議論を尽くしてしっかりやっていくのかということに尽きると思う。事務局、教育委員と引き続き我々も意見交換をしながら進めていければと考える。

(後藤次長)

意見交換をお願いした項目については以上である。今日それぞれのお立場からいただいた意見を教育総務課でもう一度持ち帰り、再度教育総務課の中で、検討をする。それをこの次、もしくはその先の定例教育委員会で方向性を固め、また地域の方々と丁寧に話をしてみたい。

その他について事務局の方からは特にその他予定はない。この際委員から何かあれば。

無ければ、議題の項目は以上で終わりにしたい。

#### 4. 閉会

(木島企画部長)

熱心な意見交換に感謝する。4月からいよいよ上諏訪小学校、上諏訪中学校の小中一貫がスタートし、現実が見えてくるところ。今日のこの会議でもわくわくするような色々な意見が出てきたと思っている。実際にスタートすればもっと色々な新しいアイデアが生まれてくる、そんな先が見えるような会議であった。ぜひこれからも、活発な意見交換ができれば良いと感じたところである。

以上を持ち、令和2年度第2回目の諏訪市総合教育会議を閉会とする。ありがとうございました。

以上